人が人を育てる大学・北海道教育大学の学生発信マガジン　学園情報誌［ヒュー・ランドスケープ］

HUE-LANDSCAPE

Autumn/
Winter
2017

NO.27

特集

自慢です。わたしのキャンパス

〈函館キャンパス〉国際交流！　マレーシアからの国費留学生

〈岩見沢キャンパス〉アートファクトリーの魅力について徹底分析！

〈札幌キャンパス〉札幌キャンパス一(いち)アクティブな「生活創造教育専攻」とは？

〈旭川キャンパス〉人との関わり合いが楽しませ成長させてくれる

〈釧路キャンパス〉はじめませんか？　ボランティア

HUE-LANDSCAPE
Autumn / Winter 2017 No.27

Contents

2 新入生の抱負2017

4 特集
自慢です。わたしのキャンパス

4 函館キャンパス／国際地域学科
国際交流！ マレーシアからの国費留学生

6 岩見沢キャンパス／芸術・スポーツ文化学科
アートファクトリーの魅力について徹底分析！

8 札幌キャンパス／教員養成課程
札幌キャンパスーアクティブな「生活創造教育専攻」とは？

10 旭川キャンパス／教員養成課程
人との関わり合いが楽しませ成長させてくれる

12 釧路キャンパス／教員養成課程
はじめませんか？ ボランティア

シリーズ

14 研究ファイル
栗林 賢 先生（旭川校）

16 教職大学院長からのメッセージ
井門 正美 先生（札幌校）

17 函館キャンパス便り
18 岩見沢キャンパス便り
19 札幌キャンパス便り
20 旭川キャンパス便り
21 釧路キャンパス便り

22 INFORMATION①
23 新任の先生方
24 人気講座紹介（函館キャンパス）
25 大学院生の研究紹介（岩見沢校）
26 教職員のエッセイ
二宮 信一 先生（釧路校）

27 保健管理センター発
28 国際交流NEWS 各校発（札幌キャンパス）
29 国際交流NEWS 国際交流・協力センター発
30 INFORMATION②
学園情報誌 HUE-LANDSCAPE 編集局から

HUE-LANDSCAPE

このキャンパスから眺める今現在の風景と、これから創造していく自分と社会の風景という意味をこめてつけました。
●HUEは “Hokkaido University of Education” より

新入生の抱負 2017

今年の4月に入学した新入生は、どんな思いを胸に未来を見据えているのでしょうか？
希望と熱意にあふれる皆さんに、その抱負を一言で表現してもらいました！

旭川

全力

旭川校・教員養成課程・社会科教育専攻１年
浪内 日雅（なみうち ひゅうが）さん

「全力」には、何事にも「全力」で取り組みたいという思いと、「全」ての人と「力」を合わせてがんばるという2つの思いが込められています。地元を離れ、旭川に来て、わからないことばかりなので、周りの人と力を合わせてがんばりたいです！

函館

生きる

函館校・国際地域学科・地域教育専攻１年
久我 凌太（くが りょうた）さん

「生きる」という言葉を大切にしたいです。一瞬の物事にとらわれず、毎日一生懸命に生きていきたいです。そして、この大学生活の4年間が、充実したものであったと感じられるように、楽しく、精一杯、後悔しないようにしていきたいです。

岩見沢

経験を生かす！！

岩見沢校・芸術・スポーツ文化学科
芸術・スポーツビジネス専攻１年
島野 慎吾（しまの しんご）さん

新しい環境になったことで、新たな関係や新しい経験を得ることができます。そこで得た経験をさらに次につなげて、自分からどんどん発信していけるように、4年間を大事に過ごしていきたいです。

釧路

可能性を広げる！

釧路校・教員養成課程・学校カリキュラム開発専攻・
家庭・保健体育分野１年
片平 貫汰（かたひら かんた）さん

大学に入り、勉強とサッカー部の両立はもちろんのこと、新たな出会いを大切にして人との関わりの幅を広げたいです。そして、新たなことに挑戦し、自分自身の人間性もより豊かにしていきたいです。

札幌

一日イッショウ

札幌校・教員養成課程
言語・社会教育専攻・社会科教育分野１年
梶本 崇仁（かじもと たかひと）さん

私の座右の銘は『一日イッショウ』です。「イッショウ」にはいろいろな漢字が入ります。例えば、「一生（一生は一日の積み重ねだから毎日悔いなく過ごす）」「一笑（一日一回は笑う）」などです。これを掲げて日々『一生』懸命がんばります！

特集

自慢です。わたしのキャンパス

五つのキャンパス間だけでなく、一つのキャンパス内でも多様な側面があり、その特長をひと言で表現するのが難しい北海道教育大学。ですが各キャンパスの「自慢」のものを挙げてもらえば、特長を理解する良いヒントになるはず。それに、自慢できるということは、良いキャンパスであることに貢献している人たちが居るということ。そんな取り組みや想いを紹介したい今回の特集、ぜひご一読あれ。

函館キャンパス

国際交流！

マレーシアからの国費留学生

インタビューの様子

函館校では、国際化推進の取り組みの一つとして、14カ国・地域の35大学と協定を結び、学生の派遣や受け入れをおこなっています。本年度4月には、マレーシアから初の国費留学生を迎えました。そこで、マレーシアからはるばる日本にやって来た、地域教育専攻・キスティナさんにインタビューしてきました！

01 日本に興味を持ったきっかけ

―どうして日本語を勉強しようと思ったのですか？

子どもの頃は日本にぜんぜん興味がなかったのですが、高校卒業後に、無料で日本語を勉強できるチャンスがありました。そこで日本語を勉強したときに、面白い言語だな、と思って。文化も他の国とは違いますよね。

―文化の違いですか。具体的にどのような違いがあると感じましたか？

日本人は、礼儀を大切にしますよね。マレーシアでも、英米国でも、そういう文化は見られないから、興味を持って、日本に留学しようと思いました。

―独学で勉強していたのですか？　それとも、学校に通ったのですか？

帝京マレーシア日本語学院という、日本語学校に通いました。

02 函館での学び

―どうして、日本の中でも「函館」を選んだのですか？

函館にはマレーシア人が少ないからです。もし私が留学するところにマレーシア人が他にいたら、その人とばかり話してしまうと思いました。日本人と話す機会を増やし、異文化を体験したいと思ったので、函館に来ました。函館の中でも、教育大学を選んだのは、教育に興味があったからです。

インタビューの様子

五稜郭公園で楽しんでいる様子

―今、いろいろな授業を受けていると思うのですが、その中でも面白いと感じた授業を教えてください。

「学校教育における心理学」という授業が楽しいです！

―山崎正吉先生の講義ですね。どんなところが面白いですか？

最初は、先生が何を話しているか全然分からなかったのですが、最近は日本語に慣れてきて、特に学習の定義についてのお話が面白かったです。学習の意味は、思っていたよりも深い意味があるということに気づきました。

―なるほど。もう他の授業の内容も理解できるようになりましたか？

大体のことは分かりますが、一〇〇パーセントではないです。特に、「教職論（初等）」の授業は、私にとって難しいです。

―私も受講していましたが、確かにテストは大変でした。日本の講義と、マレーシアの講義で大きく違うと感じた点はありますか？

私はマレーシアの大学に通ったことがないので、はっきりとは分かりませんが、友達の話を聞くと、マレーシアの講義は、時間をあまり大切にしないです。なんか悪口を言っているみたい……。

―そんなことないですよ！

例えば函館校でいうと、一限の講義は九時から始まって十時半に終わりますよね。マレーシアは、授業が早く終わることが多いです。最終試験前には、一週間前になると講義も休みになります。なので、日本の大学にテスト準備期間がなくて驚きました。テスト、大丈夫かな……。

03 今後の抱負

―最後に、函館校の皆さんに何か伝えたいことはありますか？

急に言われると、良いことを言えるかどうか、分からないけど……。

―良いこと話そうと思わなくても大丈夫、思ったことをそのまま話してくれたらうれしいです！

四年間、がんばります。この大学には、私と同じプログラムの留学生はいません。迷惑をかけることがあるかもしれないけれど、助けてほしいです。今までもみんなに助けてもらってきたけど、すごく優しい！　大学の友達と遊びに行きたいし、ボランティアもしたいです。今は特別支援に興味があるから、それに関わるボランティアをしたいです。マレーシアでは、障がい者に対する理解や関心が、日本に比べるとまだまだ低いので、ここで学んだことをマレーシアに持って帰って、マレーシア人の考え方を変えたいです。

―ぜひがんばってください！　ありがとうございました。

夜桜を楽しむ様子

インタビュアーの声

キスティナさんと同じ専攻に所属しているのですが、教育に対する熱意がしっかり伝わってきました。途中、日本語がおかしくないかな？　と何度も確認している様子でしたが、流暢な日本語で、今まで一生懸命勉強してきたことがよく分かりました。4年間、素敵なキャンパスライフを送ってください！

Interviewer
水口 史菜
（みずぐち ふみな）
函館校・国際地域学科・
地域教育専攻2年

はじめてキスティナさんに出会ったときに、マレーシアからの国費留学生であり、学部留学生でもあるということで、とても驚いた記憶があります。とてもまじめな学生ですが、とても気さくなので、いろいろな学生と沢山話をしてほしいです！　これから4年間大変なこともあるとは思いますが、楽しい学生生活を送ってくれたら、と思います！

Interviewer
佐々木 柚香
（ささき ゆか）
函館校・国際地域学科・
地域協働専攻・地域政策グループ3年

岩見沢校が誇る自慢の施設といえば、美術文化専攻の実習室があるアートファクトリー棟。絵画や立体、インスタレーション、映像といったさまざまな分野の学生たちが、日々作品制作に励んでいます。同じアトリエで各分野の学部生から大学院生が制作している全国的にも珍しいこの環境。今回はそんな魅力あふれるアートファクトリーについて紹介していきます。

岩見沢キャンパス

アートファクトリーの魅力について徹底分析！

01 アートファクトリーとは？

アートファクトリーは、絵画、映像、プロダクトデザイン、金属工芸といった芸術分野の作品制作のための施設です。鉄骨造り二階建てで、A棟、B棟から構成されていて、延べ床面積二四八〇平方メートルに及びます。

アートファクトリー棟は、平成十八年四月から岩見沢校に芸術課程が新設されることに伴い、「はまなす教育情報化推進機構」からの財政支援を受け、平成十七年十一月に建設されました。

他の棟に比べとても天井が高く、広々とした空間で自由な制作活動ができるこのアートファクトリー。学生からも「どんな大きさの作品でも作れる」、「窓が大きく過ごしやすい」など、さまざまな自慢の声を聞くことができました。オープンキャンパスでアートファクトリーを見て、入学を決めたという学生もいるほど魅力的な施設です。

02 ジャンルに富んだ充実した設備

この施設には学部二年生から大学院生までが制作や実習授業を行う各研究室と、一年生が主に実技授業や自主制作で使う合同実習室があります。

研究室二つ分の広さを持つ合同実習室（写真1）には、デッサンに使う石膏像も多く立ち並んでいますが、その中でも一際目を引かれるのが天井に届きそうなほど大きなサモトラケのニケ像。初めて見た時には、その大きさに驚いてしまいました。

他にも現代美術・平面表現実習室にあるプレス機（写真2）や、金属工芸実習室にある溶接道具（写真3）など、専門的な設備が揃ってます。

写真1
合同実習室での
授業（着彩画）の様子

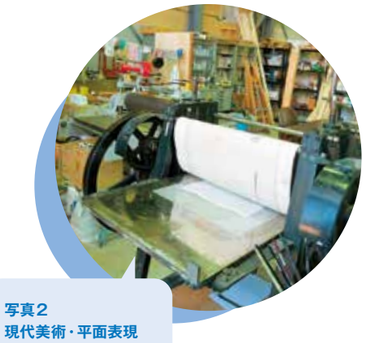


写真2
現代美術・平面表現
実習室の版画プレス機

03 他学年、他分野との距離の近さが活発な制作の秘訣？

自慢できる特色として、学部生から大学院生までが同じアトリエで制作しているという点が挙げられます。各研究室の一学年あたりの所属学生は二〜四人と少人数であるため、細かな個別指導が行われ、深い専門性と実技能力が育成されています。実は国内の美術系大学と比べてみても珍しい他学年合同のアトリエ。そのことにより独自の制作環境が生まれているようです。

具体的に油彩画研究室の所属学生がどんな大学生活を送っているか見てみましょう。油彩画実習室（写真4）には、実習授業を行う共同スペースと、一人一人の制作スペースがあり、学部二年生から大学院生までが同じ空間で制作に打ち込んでいます。同じ空間で制作することにより、お互いの作品や制作中の様子を見ることができます。上級生から作品や使っている道具について、アドバイスをいただいたり、他学年の方と意見交流をすることもできます。大学院生の方は作家として大きな活躍をしている方も多く、制作意欲がわいてくるようなありがたいお言葉をいただけることも……。こうして互いに切磋琢磨し合いながら、自分の制作に熱中できるこの環境は、精力的に作品制作を行うのにもってこいと言えるでしょう。

また、研究室同士の距離も近く、頻繁に他研究室の学生が、分野の違う研究室に出入りをして交流しています。このことも、他美術専門大学を見ると珍しい、この大学ならではの特色といえます。自分の専門分野以外の研究、制作をしている学生と交流を持つことで、さまざまな知識を学び合い、大きな刺激を受けています。

04 研究室によって空間の使い方もさまざま

絵画や彫刻、映像や工芸など、さまざまな分野の研究室があるこのアートファクトリー。研究室ごとに空間の使い方に違いがあるところも魅力です。基本的な作りは同じですが水道の大きさや位置、みんなが広く制作できるよう工夫して区切られた個人制作スペースなど、研究室ごとに空間の使い方が大きく違います。

05 学生の団らんの場としての一面も

アートファクトリーには、充実した制作環境はもちろんのこと、実は制作の合間に休憩したり雑談したりできる場所もあります。各実習室には制作スペースの他に、机や椅子などの家具が置かれた休憩スペースが設けられ、学生同士の交流、団らんの場となっています。休憩スペースには水道や冷蔵庫、たくさん食器が入った食器棚や電子レンジ、電気ポットが置かれていて、その様子はまさに落ち着いて過ごせる家のような環境になっているようです。

写真3
制作する金属工芸実習
室生の岩渕さん

写真4
油彩画実習室の実習スペースと
個人制作スペース

写真5
映像実習室で映像作品を
鑑賞しながら団らんのひと時

インタビュアーの声

調査取材をしていく中で今まで知らなかったアートファクトリーの魅力を見つけることができ、良い機会となりました。何気なく日々過ごしていたこの環境を最大限に利用して、より良い制作活動を行っていこうと思います。

Interviewer
秋本 結以
（あきもと ゆい）
岩見沢校・美術文化専攻・美術・デザインコース・油彩画研究室2年

今回のアートファクトリーについての取材を通して、美術文化専攻の方々の学生生活や作品制作の過程なども知ることができて、とても新鮮でした。音楽文化専攻やスポーツ文化専攻の棟についても取材して、普段の様子を知ってみたくなりました！

Interviewer
小原 ハナコ
（こばら はなこ）
岩見沢校・芸術・スポーツビジネス専攻・アートマネージメント音楽研究室3年

札幌キャンパス

札幌キャンパス―アクティブな「生活創造教育専攻」とは？

3年前の新カリキュラム移行に伴い、札幌校には新しく「生活創造教育専攻」ができました。技術科・家庭科を専門に扱う専攻です。そんな新専攻「生活創造教育専攻」は田植えや畑づくりなど、外での活動が盛んだと聞いた私たちは、専攻に所属する2年目・湯村さん、そして栽培領域を担当する出口先生のお二人に詳しくお話を聞くことにしました。

札幌校・生活創造教育専攻
特任講師
出口 哲久（でぐち てつひさ） 先生

01 出口先生へのインタビュー

―新カリキュラムとなり三年目になりますが、それにあたって旧カリキュラムとの変化や新しく始めたことを教えてください。

私自身が新カリキュラムとほぼ同時に赴任して来たので旧カリキュラムに直接触れる機会は乏しかったのですが、前任の先生がやっていたことは知っていて、畑での実習ではかなり引き継がせてもらっています。僕なりにやろうとしているところは、体験の先に〝農業〟が見えるようにと心がけています。

―〝農業〟を見据えているという田植え体験・畑づくりですが、その目的や学生に学んでほしいことを教えてください。

田植え体験はもともと「食育」とのつながりを深く意識した活動だったのですが、これも私は〝農業〟が見えるように意識しています。手植えをしている最中に田植え機を見せてもらったり、協力していただいている農家さんを田植えと稲刈りの間にもう一度訪問したり。また「農業教育」の観点から「農作業を通しての問題解決能力を高め、自然に対する理解を深める」といったねらいもあります。

畑づくりに関しては、それまで中学校ではあまり積極的に取り組まれてこなかった「栽培」という技術分野の一つの領域が二〇一二年度から中学校で必修化されたことを受け、現場に出たときに力強く栽培に取り組める教員を育成したいという思いがあります。また、現職の先生方のサポートにも力を入れていきたいです。

―いま考えている生活創造教育専攻の新たな試みはありますか？

私自身、赴任して来てからの三年間、試行錯誤の最中でして、まずは着実に授業や農業体験の質を向上させていきたいのが本音です。新しい試みとしては、来年この専攻で初めて卒業論文を書くことになる三年生へのサポートに力を入れていきたいです。畑での実験は一年に一回しかできないので、今年度から既に卒業論文を意識した取り組みを始めています。あとは、もともと水田で水はけの良くない今の畑の改善もやっていけたら、と思っています。

―では最後に、出口先生が考える「生活創造教育専攻の魅力」を教えてください。

中学校技術家庭科は「手を動かして楽しくやっていくこと」が重要なので、教員が自らの手で栽培等に取り組めるような教員育成のために「実習が多い」という点が一つの魅力です。また、合宿や学園祭での出店を企画するなど教員も含めて「専攻の結束力」も魅力です。これを通して、周りの人間からさまざまなことを学んでほしいと思っています。

02 湯村さんへのインタビュー

―生活創造教育専攻を選んだ理由を教えてください。

自分は何の先生になるだろうと考えた時、中学校の技術の先生を思い出しました。私はその先生の授業が大好きで、先生みたいになれたら良いなという憧れの存在でした。そうして目標の方向性が固まり、進学を決めました。

―今年取り組んだ田植えや昨年度からの取り組みを通して感じたことや学んだことを教えてください。

「田植えって一体何をすればいいの？」という状態で田んぼへ向かいました。戸惑いながらも取りあえずやってみると、味わったことのない新鮮な体験で楽しかったです。疲れて腰を伸ばすと、田植えをする機械が走っていくのが見え、機械が無く全てが手作業だった時代のことを考えました。普段なら考えもしないことを実体験によって気持ちとして理解できるのは凄いことですよね。また、機械による効率化で沢山の人々に食を行き渡らせたいという農家さんの思いも感じました。そんな思いの詰まった田んぼでの田植えは、農業という世界に自分たちの取り組みを位置付けられる良い経験だと思います。他には、機械工作実験実習では2サイクルエンジンを一度分解し、仕組みを確認してから組み立て直すということをしました。合宿では飯盒炊飯や料理もしました。一人ずつ畑を与えられ、作物を育てることもしています。このように実体験で得られる学びというのはとても大きいです。

―将来、専攻での学びをどのように生かしていきたいですか？

栽培に関して言うと、小中学校では授業等で必ず触れる機会があります。その時、適当に植物を選ぶのと大学で学んだこの知識を基にするのとでは提供できる学びが全然違いますよね。大学での学びによって、技術教育の意味を子どもたちに伝えられると思います。

―湯村さんの考える生活創造教育専攻の魅力とは？

やはり実習の多さです。他の専攻が座学の間、私たちは「とりあえずトライ」という精神で実習を行っています。分からないならとにかくやってみるというスタンスで、考えるのは結果が出てからです。机上の空論で終わらないのが最大の魅力だと思っています。

札幌校・生活創造教育専攻・
総合技術教育分野2年
湯村 赳流（ゆむら たける） さん

インタビューの様子

田植えの風景

田植え時の湯村さん

仲が良さそうな
出口先生と湯村さん

インタビュアーの声

座学が中心の他の専攻とは全く違う学習の様子に驚くと同時に、私もやってみたいと思いました。終始明るい雰囲気で、インタビューも楽しかったです。

Interviewer
天野 美代子（あまの みよこ）
札幌校・教員養成課程・
理数教育専攻・算数・数学教育分野3年

自分の専攻以外のお話を、それも講師の先生からお聞きできる機会はなかなか無いので面白かったです。出口先生もとても話しやすい方で、スムーズに楽しくお話を聞けました。

Interviewer
稲葉 拓紀（いなば ひろき）
札幌校・教員養成課程・
言語・社会教育専攻・国語教育分野2年

旭川キャンパス

人との関わり合いが楽しませ成長させてくれる

同じキャンパス内であってもそれぞれのゼミがどんな活動を行っているのかなんて知らない人も多いのではないでしょうか？　旭川校のゼミは他のキャンパスとは違い、1年生から所属します。そのゼミではさまざまな活動を学生が中心となり、また先生など周りの人たちの協力もありながら行っています。そこで普段はなかなか聞けないゼミ活動について社会科教育専攻の2つのゼミについて先生方にインタビューしてみました！

01 経済学ゼミナーの「フィリピンプロジェクト」とは

―佐々木謙一先生、例年の活動は何をしているのですか？

主に環境保全活動と国際理解教育の二つが活動の柱となっています。毎年、学生のやりたいことは少し違うが活動の根本的なものは変わっていないです。

―なぜフィリピンなのですか？

私の研究活動を通じて、フィリピンの高校や大学の先生・教授との関わりを持ったからです。

―学生と大学教員が一体となって活動をすることをどう思いますか？

基本的に私は学生が主役だと思っています。しかし、教員が学生にきっかけやチャンスを与えないということは私にはできません。ですから私が情報提供をし、「こんな活動あるけどどうする？」と問いかけ、学生がやると答えれば学生が動き出すので非常に大事なことだと思います。

―プロジェクトを通して学生にはどうあってほしいですか？

ゼミ生が現地の人とコミュニケーションをとり、楽しいと感じてほしいです。日本にいるよりは上手くコミュニケーションはとれないかもしれませんが、言葉や文化の壁を超えてコミュニケーションをとる楽しさに気づいてほしいと思っています。また、フィリピンでは模擬授業や文化交流をしていて、フィリピンの学生は積極的に授業を受けてくれるので教えるということが楽しいとも感じてほしいです。

―佐々木先生からみてフィリピンのプロジェクトのやりがいと難しさは？

やりがいはゼミ生が日本にいるときよりも、フィリピンにいるときのほうが学生はイキイキしているところや、難しそうにしながらも英語で一生懸命コミュニケーションをとろうとしているところがみられます。それらのことをみると私はうれしく思います。難しさは安全管理と健康管理です。事故は教員にとってはあってはならないことだと思っています。この二つはプロジェクトを行う上で重要で大変ですね。

―最後に一言お願いします！

旭川校はどちらかというと、学校の行事だけで盛り上がっている気がします。もちろん行事も大事ですが、環境地図作品展のようにゼミなどで多くの人と交流をし、さまざまな経験をして良い先生になってもらいたいし、良い就職先を選択してほしいです。もしかしたら自分たちが知らない範囲で教員を目指してしまっている可能性もあるので、大学生は学内だけでなく色んな人と出会って色んな話を聞いてもらいたいです。

フィリピンの学生との交流2

フィリピンの学生との交流3

フィリピンの学生の交流1

02 地理学ゼミが協力している「私たちの身のまわりの環境地図作品展」とは

「私たちの身のまわりの環境地図作品展」は環境・地図教育における弱点の是正を目指して作られたものです。小・中・高校の児童生徒を対象に、身のまわりの環境について関心を持ったこと、考えたこと、調査したことを地図にすることを通して、地図や環境に対する関心を深めてもらうことを目的に毎年十月に開催されています。環境地図教育研究会という研究会が運営しています。（国土地理院・環境地図教育研究会HPより一部抜粋）

―坂井先生の仕事はどのようなものですか？

私は数年前から環境地図教育研究会の会長を務めています。会長としての仕事は環境地図作品展に関する会議への参加などさまざまです。その会長の仕事で重要なことは「責任」と「挨拶」だと私は思っています。子どもから大人まで多くの人が関わる環境地図作品展をよりよいものにするために会長としての責任があります。また、多くの人に出会い挨拶をし、環境地図作品展をもっと多くの人に知ってもらいたいと思っています。

環境地図教育研究会会長の坂井誠亮先生

環境地図作品展のようす

環境地図作品展のようす2

―全国から手作りの地図が集まっているそうですが、それを見てどう思いますか？

とても素晴らしいことだと思います。毎年違った地図が集まってきて、毎年私たちを楽しませてくれます。小学生、中学生、高校生の地図が毎年この旭川の地に集められますが、その学年に応じて良さや考え方、取り組み方が違っていて、私たちの方が地図からさまざまなことを学ばせてもらっています。

―今後の環境地図作品展はどうあってほしいですか？

環境地図作品展は全国や海外からも多くの地図が集まっていますが、地元の旭川からの作品は多いとは言えないのが現状です。地元を盛り上げる意味でも旭川からの作品を増やしていきたいです。そのためには環境地図作品展に関わったゼミ生や教員が近い将来に授業で取り入れたりするなど地道な活動をしていくしかないと思っています。

―坂井先生、最後に一言お願いします！

二十六年間、北海道教育大学旭川校が関わっている環境地図作品展というのは日本全体でみても珍しいです。今回は環境地図作品展の話でしたが、それぞれの専攻・ゼミでもさまざまな活動をしていることを聞いています。このような活動で学生一人一人が盛り上げていってほしいです。

インタビュアーの声

この度は、ゼミ活動の取材で坂井先生と佐々木先生にお話を聞かせてもらいました。ゼミ活動では大学の壁を超えて地域交流などをしているゼミがあることを知りました。この経験を活かして、今後は教授や周りの人と共に学び、自分の学びを広げていきたいと思います！

Interviewer
小川 優汰
（おがわ ゆうた）
旭川校・教員養成課程・
社会科教育専攻2年

釧路校はボランティア活動に参加する学生が多いという印象を受けます。つまりは、ボランティアを通して出会ういろいろな方々に「ありがとう」と言われる人が多いということでもあります。「ありがとう」が溢れる釧路校。ボランティアの魅力を知るべく、そして伝えるべくインタビューしてきました。

釧路キャンパス

はじめませんか？ボランティア

地域・環境教育専攻
野外教育研究室2年
伊藤 千晶 さん

学校カリキュラム開発専攻
家庭科研究室3年
堀口 純平 さん

学校カリキュラム開発専攻
家庭科研究室1年
白﨑 清楓 さん

学校カリキュラム開発専攻
体育研究室3年
斉藤 柊一 さん

今回は、釧路校で多種多様なボランティア活動に参加している、三年生の斉藤柊一さん、堀口純平さん、二年生の伊藤千晶さん、一年生の白﨑清楓さんと幅広い学年の方々にお話を伺いました。

01 斉藤 柊一さんへのインタビュー

―なぜカンボジアに行こうと思ったのですか？

大学内の掲示板にポスターがあったのを見て、「なんか楽しそう！」と思い参加しました。春休み中ということもあり行こうと決めました。

―カンボジアには何を持っていきましたか？

キャリーバッグの中は文房具をパンパンに詰めていきました。文房具が足りない状況のため、友人から譲り受けた鉛筆や自分でも使っていた鉛筆をたくさん持っていきましたね。それと、向こうで遊ぼうとサッカーボールも持っていったらバッグの中はパンパンでしたね。しかし、持っていったものはすべて役に立ったと思っています。

―カンボジアで取り組んだ活動を教えてください。

小学一・二年生と四・五年生のクラスに入り実際に授業をしたり、丸付けをしたり、子どもと遊んだり…。話されている言語は全く分からなかったけれど、やっぱり世界中の子どもは一緒だなと感じました。先生が子どもを静かにさせるのも日本と変わらなかったです。活動を通して、自分の無力さを感じました。けれど、異文化を肌で感じ全部を知りたいと思うようになりましたね。

―ありがとうございました。

02 堀口 純平さんへのインタビュー

―ボランティアをするきっかけは何ですか？

ボランティアに取り組む友人に誘われたこともあり、それと子どもとの関わり方も学びたいと思っていたのでボランティアをしようと思いました。

―ボランティアに取り組む前と取り組んだ後で何か気持ちの変化はありましたか？

今まではボランティアはなんとなく「やってあげるもの」だと思っていましたが、実際に体験してみると「やらせてもらう」という姿勢の方が正しいと思いました。「慈善活動」というよりかは「自分でやりたいからやっている」という方が色は強いですね。

―心に残るボランティアの活動を教えてください。

今年五月に行った東日本復興支援のボランティアですかね。なんでも見なきゃ分からないと思い始めいろいろなボランティアに参加するようになりました。自分の価値観を大きく変えたきっかけになるボランティアでしたね。

―インタビューありがとうございました。

03 白﨑 清楓さんへのインタビュー

―参加したボランティアを教えてください。

六月にネイパル厚岸であった低学年の小学生が参加する「はじめてのお泊り」にボランティアスタッフとして参加してきました。このボランティアは寮の友達や先輩に教えてもらいました。

―印象に残る出来事があれば教えてください。

一泊二日という短い期間でしたが疲れま↙したね。しかし、最後に子どもたちの保護者さんからありがとうと言われたときはとてもうれしくて、疲れが達成感に変わりました。

―ボランティアの魅力はなんでしょう？

教師を目指す人なら取り組んだ方がいいと思います。実習だけでは学べないこともボランティアでは学べることもあります。なにより、たくさんの人と交流できることが一番の魅力だと思います。

―ありがとうございました。

04 伊藤 千晶さんへのインタビュー

―学習支援ボランティアをしようと思ったきっかけを教えてください。

子どもに関わる機会を増やして将来の夢に役立たせたかったからです。ボランティアを通して子どもたちへの接し方が分かり、次はこうしよう！　今度はこれを！　と学びがたくさんありましたね。

―ボランティアに取り組んでよかったなと思う瞬間はありますか？

いろいろなボランティアに参加するとスタッフさんと顔なじみになり、重要な役割を与えられたときはうれしかったです。

―取り組む前と取り組んだ後では何か気持ちの違いがありましたか？

地域のボランティアに参加するとその地域の良さに気が付くことができ、その地域が好きになりましたね。これもボランティアの魅力だと思います。

―ありがとうございました。

ボランティア活動に
取り組む堀口さん

インタビュアーの声

実は私…ボランティアに一度も参加したことがありません！　しかしこのインタビューを通してそんなに参加しづらいものではないということが分かりました。私もボランティアやりたい！　皆さんもやりたくなってきましたか？

Interviewer
渡辺 有紀
（わたなべ ゆき）
釧路校・教員養成課程・
学校カリキュラム開発専攻2年

研究ファイル

農産物流通から見える「食」の現在

人間が生きていく中で「食」というものは欠かすことができません。しかし、その欠かすことのできない食を取り巻く環境はここ数十年の間で複雑化の様相を呈しています。ではなぜ複雑化しているのか、私たちの食を将来にわたって守っていくためにはどのようなことが必要なのか。今、食を見つめなおす研究が求められています。

Presenter

旭川校・教員養成課程・社会科教育専攻

栗林 賢（くりばやし けん）先生

旭川校講師

PROFILE

1987年生まれ。佐賀県鹿島市で生まれ育ち、大学は京都教育大学、大学院は筑波大学大学院に進学。専門は農業地理学で、特に「農産物流通とその担い手」に強い関心を持ち研究を行っている。また近年は「食品ロスの削減とフードバンク団体の活動」という新しいテーマにも取り組んでいる。

私たちの「食」

今　現在、私たちはスーパーなどで野菜や果物といったさまざまな種類の農産物を見ることができますし、もちろん買うことができます。しかし、多くの場合、誰がそれを作ったのか知ることはできません。さらに言うと、誰がどのようにして、生産者のもとからスーパーに運んだのかもわかりません。もちろん、近年はトレーサビリティーの導入に象徴されるように、農産物の流通過程を把握する試みはなされています。それでも現状、私たちが消費する多くの農産物（それに関わる人々）ではある種の匿名性が保持されています。

別に誰が作ったのかわからなくても食には困っていないから気にしなくてもいいじゃないか、という意見もあるかもしれません。しかし、本当にそれでいいのか改めて考える必要に迫られています。なぜなら、誰が作ったか、誰が運んだかわからないということは、もしその誰かが何かを理由にいなくなってしまえば、私たちの享受する「食」は成り立たなくなるからです。高度に流通システムが発達をしている現在、匿名の誰かが担う役割は私たちの食にとって欠かせないものでありながらも、その匿名性と専門性ゆえに代替性の低いものとなっています。だからこそ、農産物の流通システムを正確に把握し、誰がどのような役割を担っているのかを解明することの重要性が増しているのです。では実際に把握することでどのような世界が見えてくるのか、次節でリンゴを例に話を進めていきます。

集出荷業者の保有するCA貯蔵庫（内部）

リンゴから見える流通の世界

リ　ンゴはミカンと並んで日本の二大果樹と呼ばれ、その地位を確固たるものにしています。しかし、当たり前に買うことができるリンゴがどこから誰の手によって運ばれてくるのかを知る人はそう多くないと思います。ここでは私のこれまでの研究の成果からかいつまんで、リンゴの流通の実態と抱える課題について述べていきたいと思います。その際に、リンゴの流通を消費側から迫っていきます。そうすることで、消費者である私たちの目線で捉えることができると考えたからです。

CA貯蔵庫の外観

JAの大規模な選果機

まず、私たちが消費しているリンゴは一年間を通して、スーパーなどで買うことができます。品種は主にふじと呼ばれるものがメインで、その他、多様な品種が常に陳列棚に置かれているはずです。一年中売られているということは、一年中リンゴが収穫できているかというと、そうではありません。リンゴの収穫時期は産地によって多少の差異はありますが、概ね八月から十二月までの期間になります。つまり、前述の期間に収穫されたものを一年の中で供給をしていることになります。

次に産地別のリンゴの供給時期を確認すると、実は一年を通してリンゴを供給しているのは青森県だけです。ほかにも長野県や東北各県が主要なリンゴ産地ではあるのですが、それらの産地は八月から長くても三月頃までしかリンゴを出荷できていません。このことから、私たちが一年間リンゴを消費できるのは青森県あってこそともいえます。さらにいうと、青森県は国内のリンゴの収穫量のおよそ五〇パーセント強を毎年占めており、量的にもリンゴの供給の中心は青森県です。

では、青森県で生産されたリンゴを誰が一年を通して出荷しているのかというと、主に集出荷業者と呼ばれる民間企業です。彼らは生産者からリンゴを荷受けし、県内外の卸売市場や小売店にリンゴを供給しています。青森県からリンゴを出荷する主体は大きく分けてこの集出荷業者とJA（農業協同組合）の二つになりますが、集出荷業者が一年を通した出荷の中心にいます（もちろん、JAも一年を通して出荷していますが、集出荷業者ほどではありません）。なぜかというと、集出荷業者はCA貯蔵庫という設備を多く有しているからです。CA貯蔵庫とはざっくり言うと、リンゴの鮮度を長持ちさせる貯蔵庫です。この貯蔵庫がなければ、他産地と同じように、三月頃までしか出荷できない状態となります。この集出荷業者によるCA貯蔵庫への投資が今、一年を通してリンゴを食べることができることにつながっているのです。

このように、私たちが一年を通して当たり前に消費できているリンゴは、青森県に立地する集出荷業者によるCA貯蔵庫への投資という、特定の地域に存在する特定の主体の特定の活動によって支えられているのです。しかし、その集出荷業者の活動基盤は決して安泰なものではありません。現在、集出荷業者はリンゴの価格低迷、生産量の低下により、激しい生存競争にさらされており、その数は年々減少傾向にあります。もしこのままの状況が続けば、いつかリンゴを一年を通して食べることができなくなるかもしれません。

これからの「食」を考える

こ　のように農産物流通の現実を目の当たりにすると、高度な流通システムを利用することはあまり良くないことのように感じるかもしれません。しかし、残念ながら、私たちの「食」はそのシステムを逸脱して存在することのできないレベルにまで達してしまっています。もちろん、近年は直売所の乱立に象徴されるように、生産者と消費者の距離を近づける動きも強まっています。だけれども、それは一部でしかありません。おそらくこれから先も、現状のシステムに依存するしかないと考えられます。だからこそ、私たちは常に身近にある「食」というものの在り方を考える必要があるのです。

収穫を待つリンゴたち

教職大学院長からのメッセージ

命や人権を大切にし、真摯な生き方を。

“大魔神博士”という異名をお持ちの教職大学院長、井門正美先生。教育へのお考えを始め、ご自身の学生時代や趣味など多岐にわたる質問に丁寧に答えてくださいました。

教職大学院長
井門 正美 先生
（いど まさみ）

PROFILE

群馬県出身。博士（教育学）〈筑波大学〉。2015年４月に秋田大学から本学に転任、同年10月より院長に就任。専門は学校教育学、社会系教科教育学、社会システム論。

井門研究室HP
http://www.ido-labo.com/
命の教育プロジェクトHP
http://www.ido-labo.com/edu4life/

Q 井門先生の大学時代（特に学部生の時）の話をお聞かせください。

A 早稲田大学では永安幸正先生の下で社会システム論を専攻しました。後に私の博論草稿を先生が読まれ、沢山の付箋入りでコメントをくださったことには、感服しました。サークルは早大金春（こんぱる）会（能楽）に所属し「田村」のシテを演じました。その後、学士編入学した立教大学では、理論社会学の下田直春先生の下で卒論『恩と義理』を書きました。下田先生は卒論を「力作である。将来本にするように」と評してくださいました。

Q 教員生活の後、研究への道を目指されたとのことですが、当時の話を詳しくお聞きしたいです。

A 転任の大規模中学校は大変荒れており、そのために校則は厳しく、人権侵害と言えるものもありました。小学校から移った私は学校や自らの指導に矛盾を感じ、この矛盾を克服するために研究の道に進みました。妻が後押ししてくれたことは大きな支えとなりました。

Q 役割体験学習についてお聞きしたいです。北海道の子どもたちが生きる力（社会的実践力）を培うことができる実践について、お考えはありますか。

A 役割体験学習とは、「学習者が考察対象を理解し問題を解決するための役割を担って行う体験学習」です。実習、車椅子体験、模擬裁判など、実地体験も模擬体験も大いに活用します。秋田の小学校では、激減したハタハタの漁獲量が漁業関係者の努力で回復した話を題材に、児童に漁業関係者の役割体験で討論させ、授業は白熱しました。社会科で第一次産業を扱う時、高齢化や衰退等の問題を挙げてお先真っ暗な授業になりがちですが、人々の努力や工夫で未来を拓くという内容が必要です。エネルギー転換による地域衰退や北方領土問題など、北海道には多くの重要な題材があるので、役割体験による授業づくりを推進したいと思います。

Q 我々教育大生最大のイベント、教育実習という役割体験学習を充実させるための考えをお聞かせください。

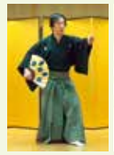
A 実習では身なりや挨拶などの社会的なマナー・常識、教師の基礎基本が問われます。本物の現場に関わらせてもらうという立場を弁え、一人の教師（役割体験）として誠実に取り組んでください。教育は重要な社会的機能ですから、教師を目指す人は勿論、教師以外の道に進む人でも真剣な役割体験はきっと役立つと思います。

Q 多くのご趣味がおありだそうですが、それについて話をお聞かせください。

A 昔「城みちるそっくりショー」という番組に出たこともあり、歌や踊りは大好きです。好きな歌手は忌野清志郎さん、玉置浩二さん、井上陽水さん、北島三郎さん、C&Kさんetc。清志郎さんは知り合いで、故人となった今でも私や家族にとって大切な存在です。写真や動画を撮るのも好きで、風景や大学院の様子などを撮っています。教職大学院の広報誌（二〇一八）にも私の撮った写真が結構載っています。

Q 最後に大魔神博士から学生へ向けたメッセージをお願いします。

A 大魔神は私の好きな映画のキャラクターで、優しい表情の武人埴輪（はにわ）が怒ると恐ろしい形相になる、その変化が好きです。他人への思いやりや優しさ、理不尽なことへの怒りや厳しさは教師にも通じるのではと勝手に解釈しています。学生の皆さんには、命や人権を大切にし、自己実現を図ることが社会全体の公共善に向かうよう、真摯に生きてほしいです。昨今は、柔和な武人埴輪が大魔神になって暴れ出しそうな社会情勢です。それを防ぐには、主権者としての私たち一人ひとりの意識と行動が重要だと思います。



能を舞う井門先生

井門先生と大魔神像

井門先生撮影

インタビュアーの声

井門先生はとても明るくてユーモアのある優しい方でした。今回してくださったお話は、教育大生としての自分を見つめ直す契機になりました。

Interviewer
天野 美代子
（あまの みよこ）
札幌校・教員養成課程・理数教育専攻・算数・数学分野3年

函館キャンパス便り

地域に対して活発なアプローチを行っていることで学内でも有名な函館校・国際地域学科・地域協働専攻・地域政策グループの古地順一郎准教授のゼミにお邪魔しました。2年生7人、3年生5人、4年生7人の計19人で構成されるこのゼミでは、どのような研究や活動が行われているのでしょうか？古地先生とゼミ生にインタビューしました！

函館校一アクティブ!?地域のお祭りに参加するゼミとは……？

写真2
国際地域学科・地域政策グループ
古地 順一郎 准教授

写真1 ゼミの様子

写真3
ゼミ生と古地先生へのインタビューの様子

写真4 江差姥神大神宮祭での活動

―どのような研究をしているゼミなのでしょうか？

古地先生　地域の政治や、政策について研究しています。私自身は、カナダ政治、多文化共生、移民政策について主に研究してきました。函館校に着任してからは、地域創生や多様性を生かしたまちづくりについての研究を進めています。

―どのような活動をしていますか？

古地先生　二年生には方法論や入門レベルの文献を読むことで政策研究の基礎をつけてもらい、三年生には政策研究のより専門的な論文を読んでもらいます。課題としては、毎週千五百字の要約と批判的検討を課しています。論理的思考力を養うためには書くことが大事だと考え課題を出していますが、みんながんばっています。課外活動としては、江差町を主なフィールドとし、江差町の課題に関する調査研究を行っています。また、毎年八月九～十二日に開催される姥神大神宮渡御祭にも参加しています。（写真4）男子は神輿を担ぎ、女子は山車引きを担当します。

ゼミ生（四年）　神輿はとても重くて、担ぎながら二〇km以上を歩きます。きついですが、みんなで力を合わせてがんばっています。北海道大学や北海道情報大学の学生も参加するので、他大学生との触れ合いも楽しめます。

―古地先生のモットーは何ですか？

古地先生　モットーですか？（笑）ゼミ生に対しては「クリティカルシンキングを持て」です。入ってくる情報を鵜呑みにせず、批判的に検討する力を付けてほしいと思います。また、批判を恐れずにアイディアを出し合ってもらいたいです。個人攻撃はいけませんが、アイディアの批判を楽しみながら互いに高めていってほしいです。自分のモットーは「後悔しない人生を送る」です。これはゼミ生にもいえますが、失敗を恐れずに何事にも挑戦していってほしいです。殻の中に閉じこもるのではなく、関心があればあえて自分の居心地の悪いところに行ってください。

―今の学生に言いたいことは何ですか？

古地先生　一歩前に出てほしい。ゼミ生は二歩前に。変に小さく丸くならないで！　失敗を恐れないで！　ダメでもともと、とにかく行動してみてください。

―ゼミ生の皆さんは古地先生に対してどのような印象を持っていますか？　また、古地ゼミの良いところはどこですか？

ゼミ生（四年）　古地先生は私たちのことを本当によく考えてくださっています。そしてとても的確なアドバイスをしてくれます。また、とても豊富な知識を持っておられるのに、謙虚でいらっしゃいます。

古地先生　「実るほど頭を垂れる稲穂かな」

ゼミ生（二年）　おぉ～!!!

ゼミ生（二年）　私はまだゼミに入ったばかりですが、数々のレポートを書いたおかげで今は二千字書くことも余裕に感じられます。古地ゼミで良かったと思います。

古地先生、古地ゼミの皆さん、インタビューにご協力いただきありがとうございました。

インタビュアーの声

古地先生のゼミには何人か知り合いがいて、いつも自分らしさを発揮してさまざまな活動に励む方が多い印象でした。今回のインタビューで古地ゼミ生の背景には、古地先生のモットーがあるのだなと感じました。自分自身も残りの学生生活を「後悔がないように」活動しようと思う良い機会になりました。

Interviewer
堀江 音名
（ほりえ ねな）
函館校・国際地域学科・地域協働専攻・国際協働グループ3年

ゼミの雰囲気としては、とても楽しそうな印象を持ちました。古地先生もゼミ生もお互い言いたいことを言えるような関係性はすばらしいと思いました。古地ゼミの皆さん、これからも地域の活性化に向けてがんばってください！

Interviewer
山邉 瑞穂
（やまべ みずほ）
函館校・国際地域学科・地域教育専攻2年

岩見沢キャンパス便り

岩見沢校・芸術・スポーツ文化学科・音楽文化専攻・管弦打楽器コース3年
谷内 志織（たにうち しおり）さん

北海道教育大学岩見沢校の音楽文化専攻が毎回開催している定期演奏会。その総演奏者数は200人以上！　定期演奏会実行委員長である谷内志織さんに表・裏側から見た演奏会のお話を聞いてきました！

岩見沢校音楽文化専攻の学生が全員でつくる定期演奏会とは……??

―定期演奏会について教えてください。

北海道教育大学岩見沢校の音楽文化専攻全体の演奏会で、毎年十二月に岩見沢（まなみーる岩見沢市民会館）と札幌（札幌コンサートホールKitara）の二カ所で行っています。今年度で開始から九回目を迎えます。当日は、二つのコンサートで聴けるのは珍しいと思います。また、毎年オーディションで選出されるソリストとの協奏曲も見どころです。今年度のソリストはフルート、チューバ、ピアノ専攻の学生に決定しています。

―定期演奏会に向けてどんな準備を行っているのですか？

定期演奏会実行委員が中心となって選曲からプログラム・チラシの作成、広報活動、会計、当日の舞台転換など、演奏会の企画・運営ほぼすべての準備を学生で行っています。また「地域プロジェクトⅢ」という授業の一環として道内の小・中学校に案内状を郵送したり、直接届けに行ったりしています。このほかにもタイムキーパーや楽譜の管理などたくさんの仕事を分担して、練習と演奏会運営を両立させています。

―最後に、実行委員長からのメッセージをお願いします！

今年度は十二月十二日（火）に岩見沢公演、十二月十三日（水）に札幌公演を予定しています（詳細は下段）。毎年音楽文化専攻の学生全体でつくり上げると同時に一年間の集大成をお客様に見せる大切な場でもあります。学生全体でよい演奏会をつくるので、ぜひお越しください!!

昨年度の様子。合唱曲は出演者のほぼ全員が舞台上に

リハーサルの様子

定期演奏会実行委員長の谷内志織さん

インタビュアーの声

以前からお客さんとしてだけでなく演奏者として参加してみても、とても魅力的な演奏会だと感じていたので、今回さらに裏側の部分も掘り下げることができてよかったです！　今後の演奏会がさらに楽しみになりました。少しでも多くの人に魅力を知ってもらって、定期演奏会に足を運んでいただけたらと思います。

Interviewer
小原 ハナコ
（こばら はなこ）
岩見沢校・芸術・スポーツ文化学科・芸術・スポーツビジネス専攻・アートマネージメント音楽研究室3年

平成29年度北海道教育大学岩見沢校
芸術・スポーツ文化学科・音楽文化専攻 定期演奏会

■岩見沢公演
12月12日（火）
入場無料（整理券配布）
まなみーる岩見沢市民会館

■札幌公演
12月13日（水）
入場料1,000円（全席自由・小学生以下無料）
札幌コンサートホールKitara

連絡先：hokkyodai_iwa_music_teien@yahoo.co.jp

札幌キャンパス便り

札幌校・教員養成課程・理数教育専攻・理科教育分野・地学グループ1年
新井 慧（あらい さとい）さん

昔から「出る杭は打たれる」ということわざがありますが、今回は“飛びぬけた個性を発揮している学生を紹介する”というコンセプトのもと、私たちは札幌校で「打たれず」に素晴らしい個性を発揮している学生を調査しました。その中から、TOEICで高得点をとったという1年生の新井さんにインタビューを行い、彼なりの勉強法から活発なサークル活動までさまざまなお話を聞いてきました。

TOEICで高得点！専攻は理科で英語も得意!?
「学び」を追究し続ける学生のお話

インタビューに答えてくれた新井さん

―TOEICで高得点をマークしたという新井さんですが、海外研修などの経験がおありなのでしょうか？

いいえ、ありません。学校などでの勉強だけです。

―意外です。それでは、英語を勉強する上での工夫やコツはありますか？

英語の文章、本などの長文を読むのが好きだったので、そこで力がついたのではと思います。

―海外文学を読んでいたのですか？

厚い本ではなく、模試などで引用されていて興味を持った文献や資料、作品を図書館などで探して読んでいました。

―なるほど。模試で読んで終わり、ではなく興味を持ったら追究するという姿勢がコツなのかもしれませんね。また、グローバル教員養成プログラム（GEL）プロにも参加されているとか。

はじめはただ英語を「読む」ことが好きで留学などは考えていなかったのですが、英語の文章を読んでいるうちに「自分も英語を話す人と会話できたら面白いのでは」と思うようになり参加しようと決めました。

―大学での新たなステップですね。それでは、英語以外にも好きな教科はありますか？

「生物」です。高校の時から好きだった生物を違う視点から見てみたいと思い、現在では地学科に所属しています。

―一度距離を置き、別の角度から見てみる。好きなものだからこそできること、ですね。学業についての話題が続きましたが、所属サークルなど課外活動についても教えてください。

「サークルブラスバンド」と「混声合唱団」にも入っています。小学三年生からやっているチューバと中学から始めた合唱を続けています。

―長年、音楽も好きなのですね。ちなみに今後の大きな活動の予定はありますか？

サークルブラスバンドの方では八月に吹奏楽コンクールが、混声合唱団では他キャンパスと開催するジョイントコンサートがあります。

―それらに向けて練習がんばってください！　最後に、新井さんの今後の大学生活の目標、そして将来像があれば教えてください。

社会に出てしまうと学ぶ機会というのが限られてしまうので、この四年間はできるだけ多くのことを学び、知識・教養を身につけたいです。GELプロに参加したのも、専攻科目を学びながら英語を勉強できるなら是非そうしたい、という思いからでした。また、僕は「学ぶこと」が好きなので、将来はその魅力を伝えられるような教育に携わる仕事をしたいと思っています。

ありがとうございました！　応援しています。

インタビュアーの声

当初は「TOEIC でスゴい点数をとった1年生がいる」という話を聞いていただけなので「どんな人なのかな」と思っていましたが、実際にお会いしてみると、とても話しやすく謙虚で丁寧な人でした。お話ししている間も1年生とは思えないような落ち着いた様子で、「学ぶ姿勢」についてのお話はとても考えさせられるものでした。今後4年間の彼の活躍に期待です。

Interviewer
稲葉 拓紀
（いなば ひろき）
札幌校・教員養成課程・言語・社会教育専攻・国語教育分野2年

旭川キャンパス便り

旭川校ならではの行事「五月祭」。5月に新1年生を中心に各専攻の白熱した闘いが繰り広げられています。それと同時に、新たな出会いの機会ともなり、専攻、学年の壁を越えて交流が行われています。笑顔あり、涙ありの祭。それが「五月祭」です。今回、教員にも関わらず、サッカーに出場し活躍された英語科教育専攻の笠原先生と、五月祭実行委員長の大手さんにお話を聞きました！

闘い、出会い、感動する「五月祭」
―喜怒哀楽の祭―

勝利をともに喜び合う学生たち

【笠原先生へのインタビュー】

―笠原先生がサッカーの試合に出場していたと伺ったのですが、その時の率直な感想を教えてください。

率直に楽しかったです。主に英語科専攻の学生さんと一緒に体を動かして、楽しかったですし、また、違った専攻の学生さんともサッカーの試合を通して関わることができたので良かったです。

―笠原先生は、なぜこの五月祭のサッカーの試合に出場しようと考えたのですか?

インタビューに答えてくれた笠原先生

私は中学から大学までサッカーを続けていました。現在は学生の頃ほどは、サッカーに取り組んではいないのですが、知人がサッカースクールを開催しているため、時々そこに行って手伝いをしています。その影響もあり、趣味がサッカーをすることで、それが一番のきっかけです。

―学生とサッカーをするということで関わりも持てると思いますが…

そうですね。普段、授業などで見られない学生の生き生きしている姿を見ることができますし、英語という教科はコミュニケーションをとる教科なので、サッカーを通してコミュニケーションをとるということも大切にしていました。また、普段の生活でも学生のいろいろな姿を知りたいと思っています。これは教育実習でも担当教員に言われることで「昼休みに話そう」や「部活に顔を出してみよう」などと言われるが、そういうことを実践することで普段見られない学生の様子が分かると思います。それって、教員にとってすごく大切なことじゃないかと思います。

―笠原先生、最後に今後の五月祭への抱負を教えてください。

私の体が動く限り、できるだけ長く試合に出られるようにがんばりたいと思います。

【大手さんへのインタビュー】

―大手さん、今年の五月祭はどうでしたか?

無事に終わり成功しました

インタビューに答えてくれた大手さん

―大手さん、実行委員長をして苦労したことはありましたか?

去年は一年生として参加していましたが、運営をする立場となり、全く何をすればよいか分からなかったです。また、運営委員との意思疎通ができていないことがあり、苦労しました。だけど、当日楽しく競技をしている皆さんを見て苦労したかいがありました。

―来年の五月祭はどうあってほしいですか?

今年の五月祭の経験を踏まえて、引継ぎをスムーズに行い、来年の運営委員が困らないようにしたいです。そして今年よりも何事もなく良い五月祭であってほしいと思っています。

インタビュアーの声

五月祭は旭川校全体が盛り上がるイベントの一つです。1年生にとっては同学年や先輩との交流の場にもなっています。学生が主体となり運営することも簡単ではないと思いますが、学生一人一人の協力もあり成り立っているものだと改めて感じました。笠原先生のように先生方が競技に参加するのも良いと思います。

Interviewer

中村 昂平
（なかむら こうへい）

旭川校・教員養成課程・
社会科教育専攻2年

バスケットボールをする学生たち

走る学生たち

釧路キャンパス便り

学生ボランティア活動が盛んに行われている釧路校。今回紹介するのは、バスケットボール部がお手伝いをしている“Jumpers（ジャンパーズ）”の「スポーツ教室」という活動の中で、プチ運動会を行った様子です。まず、Jumpersについて、主催している北海道警察釧路方面本部の担当者佐藤さんにお話を伺いました。次に、小・中・高等学校の子どもたちと、どのような気持ちで交流して活動に取り組んでいるのか、バスケットボール部主将中平珠莉さんにインタビューしました。

ボランティアで子どもを支える学生たち

【佐藤さんへのインタビュー】

―Jumpersとは何ですか?

佐藤さん　北海道警察で運用している大学生ボランティアの名称です。正式には、大学生ボランティア「Jumpers」といいます。少年の健全育成を目的としたさまざまな活動に参加してもらっています。

全体説明

―この活動はスポーツ教室以外にどのようなものがありますか?

少年たちと年齢の近い大学生だからこそできる少年の立ち直り支援活動があるのではないかと考えたことが始まりだそうです。

―Jumpersで行われている活動はスポーツ教室以外にどのようなものがありますか?

佐藤さん　Jumpersが主催するという意味だと、釧路方面では現時点でスポーツ教室だけになります。ですが、特に決まりがあるわけではないので、主催してくれるJumpersがいれば、他の活動もJumpers主導で行うこともあります。スポーツ教室の他に、農業体験や料理教室、環境美化活動、防犯啓発活動、学習支援などのジャンプ活動があります。

※ジャンプ活動とは…Jumpersが参加しているさまざまな活動の総称で、正式には「少年の居場所づくり（＝JUMP）活動」といいます。

二人三脚の様子

中平さん

【中平さんへのインタビュー】

―この活動に参加している理由は何ですか?

中平さん　集団行動や社会参画に慣れていない子どもに一歩踏み出すきっかけを作ってほしいからです。さまざまなスポーツを体験することを通して、相手の気持ちを考えること、自分の気持ちを伝えること、仲間と協力することの楽しさを知り、今後の生活に活かしてほしいと考えているからです。ちなみに、今回のプチ運動会の目標は「協力」です。

―今回の活動に参加した中学生にアンケートをとったところ、8割以上の生徒が、「楽しかった」と答え、その多くが、みんなで協力しながら競技できたことが楽しかったと答えていました。こうした子どもたちの反応をどう感じますか?

中平さん　少しでも私たちの想いを感じ取ってくれた子がいてくれて素直にうれしいです。また、そう思ってくれる子が増えることを願っています。

―この活動が自分の将来にどのようにつながると思いますか?

中平さん　一番は子どものことを考えられるようになりたい。子どもたちはいい意味でも悪い意味でも表情を顔に出してくれるので、それを素早く読み取り、どうしたらみんながいい顔をしてくれるのかを考えられる力を身に付けられると思います。楽しい！　みんなと協力できた！　と思ってもらえるような活動（授業）を展開できるような教師になる一歩にしたいです！

インタビュアーの声

子どもたちが楽しく取り組んでいる様子を見て、私もボランティア活動に積極的に参加したいと思いました。釧路校でボランティア活動に励む学生は多く、いろいろな人に貢献しているのだと考えると、とても誇らしく感じます。もっとボランティア活動の素晴らしさが皆さんに伝わればいいなと思います。Jumpers の活動について興味を持った方は「大学生ボランティア Jumpers」で検索してみてください！

Interviewer

西村 日花里
（にしむら ひかり）

釧路校・教員養成課程・
学校カリキュラム開発専攻2年

Hello! 新任の先生方

平成29年4月以降に教育大にいらっしゃった先生方に、
下記の項目にお答えいただきました！

1出身地　2出身大学・学部　3前職　4学生時代の夢
5教育大生の印象

読者のほとんどが大学院生ではないので、2ではあえて出身学部を伺っています。

種市 信裕（たねいち のぶひろ）先生

札幌校・教授
理数教育専攻［確率論、統計数学］

1芦別市生まれ主に釧路市育ち　2北海道大学理学部数学科　3鹿児島大学大学院理工学研究科数理情報科学専攻教授　4まだ具体的な夢は無かった　5性格が良くまじめ

津田 拓郎（つだ たくろう）先生

旭川校・准教授
社会科教育専攻［外国史］

1札幌生まれ、3歳から岩手県前沢町（現:奥州市）2東北大学文学部　3愛知県立大学他4校5キャンパスで非常勤講師。今と違って通勤が大変でした。4文学部に入ったときから西洋史を研究する学者になりたいと思っていましたが、酷い怠け者でした。5教員養成課程だけあってまじめでしっかりした学生が多い印象を受けています。

川俣 智路（かわまた ともみち）先生

教職大学院（札幌校）・准教授
高度教職実践専攻［思春期臨床、通常学級での学習支援］

1札幌出身　2北海道大学教育学部　3大正大学という仏教系の大学に勤めてました（写真は前の大学で撮ったものです）。　4漠然と研究を続けたいと思ってました。　5印象は人それぞれ、一言では難しいです。せっかく大学へ来たのだから、普段の自分より少しだけ背伸びしていろいろなことに挑戦すると、人生楽しめますよ。どうぞ今後ともよろしく。

姫野 完治（ひめの かんじ）先生

教職大学院（札幌校）・准教授
高度教職実践専攻［授業開発］

1札幌市生まれ　2北海道教育大学函館校　3秋田大学で12年、北海道大学で2年半教員をしてきました。　4小学校教師になりたいと思っていましたが、アルバイトばかりの大学生活でした。もう少し勉強しなければと大学院へ進むうちに、先生方を支える研究者を目指すようになりました。　5学部の学生や先生方と関わる機会がないので、もっと関わりたいです!!

稲葉 浩一（いなば こういち）先生

教職大学院（旭川校）・准教授
高度教職実践専攻［教育社会学、生徒指導論］

1神奈川県川崎市、工場地帯の反対側。梨畑に囲まれて育ちました。　2立教大学文学部教育学科　3熊本県の女子大で教えていました。　4大学生時代に師匠に出会い研究者を志しました。でもかなりの不良生でご迷惑をおかけしてきました（汗）。5茶髪率が低いことに地味に驚いています（笑）。

梅本 宏之（うめもと ひろゆき）先生

教職大学院（釧路校）・特任教授
高度教職実践専攻［授業開発、特別活動］

1北海道旭川市　2北海道教育大学教育学部旭川分校　3釧路市立幣舞中学校長　4大好きなサッカーと教職を就職後もずっと両立させることを考えていました。　5小中学校にフィールド生として来ていた教大生が、年々成長していくのがわかりました。とても頼もしく感じていました。

中村 吉秀（なかむら よしひで）先生

教職大学院（函館校）・特任教授
高度教職実践専攻［学級経営、学校経営、校内研修］

1函館市で生まれ、人生の大部分を函館市で過ごす。2北海道教育大学函館校小学校課程　3函館市立桔梗中学校の校長として退職後、教職大学院で「求められる学校経営・校内研修の在り方」を模索している　4大学時に学んだ美術（彫塑の世界）に憧れていた。　5真摯に取り組む姿は素晴らしい。多様な学びの過程で自分のよさを認識し力を高め広げてほしい。

三上 清和（みかみ きよかず）先生

教職大学院（函館校）・特任教授
高度教職実践専攻［生徒指導、教育相談］

1北海道で一番歴史の古い上ノ国町　2北海道教育大学札幌分校教育学部　3函館市立駒場小学校長　4教育大生はほぼ全員教員になれた時代を過ごしました。ゼミよりはバイト・サークル等、社会勉強に明け暮れておりました。夢はもう現実でした。　5私も教育大生でしたが、昔は個性的でいろんな方達がおりました。今は真面目で熱心に勉強する学生が多いように思います。でも、みんな先生になる時代ではないので厳しいですね。

INFORMATION

北海道教育大学公式Facebookでつながろう

北海道教育大学公式フェイスブックでは、大学をより身近に感じてもらうために、ニュースやイベント情報、5キャンパスの特色ある取り組みをリアルタイムでお知らせしています。
たくさんの「いいね!」をお待ちしております!

北海道教育大学公式Facebook ► www.facebook.com/hokkyodai

【学生生活】

旭川校（5/29掲載）

旭川校で「五月祭（体育祭）」を行いました

【学生生活】

釧路校（7/4掲載）

釧路校学生が「酪農家民泊体験実習」に参加しました

【イベント情報】

札幌校（8/10掲載）

「札幌校オープンキャンパス」を開催しました

函館校（5/18掲載）

「はこだて多文化共生シンポジウム」を開催しました

【学生の活躍】

岩見沢校（6/8掲載）

岩見沢校サッカー部が第41回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント北海道大会で優勝しました

人気講座紹介　RECOMMEND!

函館の魅力がよりどりみどり！

函館・道南地域にはどんな一面があるのだろう？　まだまだ知らない多くの函館・道南地域の魅力を知ることができます。道外出身の学生はもちろん、道内出身の学生も楽しめる授業です！

授業の様子

函館校［前期］

北海道・函館スタディズ

函館校・地域教育専攻・教授
田中 邦明（たなか くにあき）先生

PROFILE
函館市出身。北海道大学大学院水産学研究科博士課程修了。平成２年４月より北海道教育大学函館校に着任。

※田中先生は、この講義の取りまとめ役であり、松浦 俊彦（まつうら としひこ）先生、畠山 大（はたけやま だい）先生による共同開講の科目となっています。

受講生に聞きました！

Q この授業を受けてみてどうですか？

A❶あまり函館のことを知る機会はなかったのですが、この授業を通して、いろんな視点から函館のことを学ぶことができ、これからの函館での生活が楽しみになりました。（地域教育専攻・島田 ほのか）
❷函館の歴史や文化、環境について知るいい機会であり、ゲスト・スピーカーから貴重なお話も聞けるので、なくてはならない授業だと思う。（地域協働専攻・岩渕 竜也）

―「北海道・函館スタディズ」が始まったきっかけはありますか？

この科目は北海道教育大学全体で導入された「北海道スタディズ」という、地域を学ぶための教養科目がきっかけとなっています。北海道教育大学には北海道外出身の学生が少なくないことに加えて、北海道出身の学生も札幌などの都市部以外の地域のことをほとんど知らない傾向が強くあります。科目新設の一つの理由として考えられるのは、学生が卒業し教員となったときに、へき地を含む北海道各地に転勤する希望者があまりにも少ないことに危機感を抱いたからかもしれません。その後、函館校にふさわしい地域学系の教養科目として「北海道・函館スタディズ」と名称が変わり内容も変わっていきました。

―具体的な内容・目的はどういうものですか？

一つ目は、この科目を通して北海道だけにとどまらず、函館・道南地域にも視点を置き、行政、経済、教育、環境、文化などの特徴を理解することです。二つ目は、学生自身が函館市民としての義務と権利、役割を自覚し、社会参加の態度を養い、有意義な学生生活を送るための知識と態度を養うことです。

―この授業の魅力は何ですか？

毎回の授業において、まずは担当教員による導入的なレクチャーを実施した後に、ゲスト・スピーカーとして、函館校の教員やキャンパス・コンソーシアム函館の関係者、函館市役所などの自治体職員や地域企業の経営者など、函館・道南地域の有識者を招き、授業を行っています。受講生にとって、函館・道南の歴史や魅力を学ぶことで、これまでに地域がどう進化していったのかが理解でき、学生の将来の進路に生かしていくことができるような講話内容のゲスト・スピーカーを選んでいます。

―受講生に対しての思いは何かありますか？

学生が多種多様な視点を身に付け、まだ知らない函館・道南地域の歴史や魅力を知ってほしいです。そして、自分で気になったことを調べて自分の足で歩んで行けるように、友達や親が来たときにはガイドとなって函館・道南地域を案内できるよう、人に伝えていけるようになってほしいですね。また、せっかくの函館での大学生活4年間を、この授業で学んだことを生かし、楽しく、充実した学生生活にしてほしいです。

インタビュアーの声

今回の取材を通して、函館の魅力はまだまだ知らない事がたくさんあることに改めて気づくことができました。協力してくださった皆さま、ありがとうございました！

Interviewer
濱田 亜弓（はまだ あゆみ）
函館校・国際地域学科・地域協働専攻・地域政策グループ3年

函館を題材にわかりやすく地域の事を学び、知ることで自分たち自身が楽しめることに感銘を受けました！

Interviewer
松村 菜美子（まつむら なみこ）
函館校・国際地域学科・地域教育専攻2年

大学院生の研究紹介

岩見沢校・芸術課程・美術コース・絵画専攻・油彩画研究室卒業
北海道教育大学大学院・教科教育専攻・美術教育専修・油彩画研究室2年

話＝**三村 紗瑛子（みむら さえこ）さん**

情緒的な室内空間を描く

アトリエでの制作の様子

―大学院に進学したきっかけは何でしょうか？

学部三年生の終わり頃に、大学院に進学することを決めました。それまでに道内でグループ展や公募展への出品、地元青森県で個展を行うなどしていたのですが、活動を通してもっと制作を続けていきたい、専門的に学びたいという気持ちが強くなり、院へ進むことを決めました。

―三村さんは美術雑誌「美術の窓」の特集記事「新人大図鑑2017」でも今後の活躍が期待される新人作家として掲載されていましたね。どういった発表活動をされているのでしょうか？

去年は茨城県つくば美術館で開催された「FINEART展」という展覧会に北海道教育大学の推薦作家として出品させていただいたり、一般社団法人二紀会が主催する二紀展に出品したりするなど、道外での発表も多く行いました。また、二〇一七年三月に東京都美術館で開催された第十三回春季二紀展では、新人選抜奨励賞も受賞させていただくことができ、とてもうれしく思います。今年の四月には、大阪の画廊大千の推薦作家として「フェスタアート大阪2017」に出品しました。

―現在、どのような研究を行っていますか？

作品制作では、主に油絵具を用いて、室内空間を描いています。室内空間でも、矛盾するモチーフを意図的に配置させて空間を作り上げています。

私は自分の作品の室内空間を描く際に、情緒性を大事にしています。その中で自分の絵をもっと良いものにしていくために明暗の構成を研究していくことになりました。そこで、作品の制作と併せて、二十世紀にアメリカの都市や郊外の風景を描き活躍したエドワード・ホッパーという画家の作品研究を行っています。ホッパーの作品から出る情緒や、もの哀しげな印象というのが、明暗表現によって演出されているのではないかと仮定して研究を行っています。

ホッパーは、風景や人物といった具体的なモチーフを描いているので、作品の情緒性と明暗表現の関係性について簡単に説明することは難しいのですが、影響を受けたと思われる作家について調べたり、ホッパーの絵画作品をさまざまな切り口で形式分類したりしながら、彼が何を考えて制作していたのかを探っています。ホッパーの研究を通して私自身の作品制作における表現の幅を広げていきたいと考えています。

―大学院卒業後の進路や活動について教えてください。

作品制作や発表活動を通して蓄えた経験、大学で学んだことを生かして、美術の教師になりたいと考えています。美術は世界をさまざまな視点から見ることを教えてくれる教科です。美術を通して柔軟に思考することができる生徒を育てていきたいですね。また、教師になった後も制作活動を続けていきたいと思っています。卒業後も意欲的に制作をしていけるよう現在の研究と制作もがんばります。

―教師になるための勉強をしながら修了制作の作品制作や修士論文の執筆に取り組んでいる三村さん。これからすぐに公募展への作品出品も控え、制作されているそうです。

「第13回春季二紀展」の会場で新人選抜奨励賞受賞作品を前に

インタビュアーの声

いつも魅力的で洗練された作品を作り出す三村さん。その活躍の裏にある制作に対する考えや、研究内容について詳しく教えていただき、美術が専門の私にとっても、学ぶことの多い取材となりました。

Interviewer
秋本 結以（あきもと ゆい）
岩見沢校・芸術・スポーツ文化学科・美術文化専攻・美術・デザインコース・油彩画研究室2年

文＝二宮 信一（にのみや しんいち）先生
釧路校 教授

PROFILE

法政大学文学部日本文学科卒、北海道ＹＭＣＡを経て、北海道大学大学院教育学研究院博士後期課程単位取得退学。専門は、特別支援教育学。へき地の特別支援教育に関する調査・研究をしている。

教職員のエッセイ
Essay

状況の中で最適解を探すということ

キャンプが教えてくれたこと

私は、民間の社会教育団体で、青少年の教育キャンプの指導やマネージメントという仕事をやっていました。キャンプ活動は、天候や自然環境、参加する子ども、指導するキャンプリーダーの技術など「変数」の多い活動ですから、予定通りに進むこともありますが、いつもその通りに事が進むということではありません。キャンプファイヤーを予定していても、雨が降れば、簡単に変更を余儀なくされます。グループピングした子ども同士やそのグループを担当するリーダーとの相性などある程度の想定はできますが、始まらないとわからないことが多いのがキャンプの活動です。もちろん、参加した子どもや、知的障害、肢体不自由のある子ども、自閉症のある子どもの親子キャンプもやっていましたので、対象により体力が違いますし、暑い日が続けば、その想定も変わってきます。それは、活動内容の調整だけでなく、食事の量などにも影響します。

キャンプを運営するためには、当初の計画に基づきつつも、多様な変数の条件の中で、楽しく、豊かな経験が一番積める安全な活動を、常に模索しながら進めていくということになります。つまり、キャンプは、常にアレンジとひらめきが求められる活動ということができるでしょう。

不確実性の中で判断する

今から二十二年ほど前に、ＬＤやＡＤＨＤ等の発達障害のある子どもたちの支援クラスを開発し、子どもたちを直接指導することになりました。子どもたちにとっては、「遊びの教室」のような形になっていて、対人関係を学んだり、自分の良さを発見したりするクラスです。多くの子どもたちがやってきて、楽しい活動ができたのですが、時には、お母さんと喧嘩して、遊びに上手に乗れない時があったり、こちらの準備した教材に目もくれなかったりと、予定通りに進めることができないことも、多々ありました。そのような時は、状況の中で新たな活動を模索するということになります。

私たちは、不確実な状況をできるだけ減らして、確実性の高い中で活動をしたいと考えます。その方が安心ですし、見通しが持てるからです。しかし、そのような「こうすればうまくいく」という「正解」や「確実性」を求める固定的で静的な考えで子どもと向き合えば、子どもの抱えている状況を無視することになってしまいますし、子どもの持てる力や良さを引き出すことを阻害してしまうかもしれません。むしろ、状況は、不確実ですし、複雑で多様なファクターの中にあります。私たちに求められているのは、状況の中での「最適解」を探る「動的な営み」であると思うのです。それが、振り返った時にうまくいっていれば「その時の判断」が、「結果として正解」だったのかもしれません。しかし、その状況も変化しますから、一度「正解」としたことがらも、新たな「最適解」を探る作業が必要であり、それがその後も繰り返されていくのだと思うのです。

保健管理センター発

進路に悩むこと、「自分」を作ること

大学に入ってから、進路について悩む人は多く見られます。なぜなら、どのような進路を選ぶのかということは、自分とは何かという「アイデンティティ」形成の課題と深く結び付いているからです。

進路を決めたつもりだったけれども……

皆さんはいつごろから、自分がどんな職業に将来つきたいのか、どんな人生を歩みたいのかを考え始めましたか？
早い人は、小学生の頃に「将来は担任の先生のような立派な教師になりたい！」と決めていたかもしれません。しかし、多くの人は高校時代にどこの大学を受験するかを考える時に、大学で何を勉強して、将来どんな職業につくのかということを初めて具体的に意識するのではないでしょうか。

しかし、いざ大学に入学してみたものの、期待していたほど授業を面白く感じられない、あるいは教育実習に行ってみて、「自分は本当に教師に向いているのだろうか」と悩み始める人も実は少なくありません。そして、ここを特に強調しておきたいのですが、一度決めた進路について悩んだり、不安を感じて揺れ動くというのは決しておかしなことではないのです。なぜなら、そのような心の揺れ動きは、あなたが「自分」とは何かという問題に誠実に向き合っていることを示しているからです。

大学時代に「自分」を作る準備をする

心理学では児童期と成人期の間、つまり中学生から大学生ぐらいまでの時期を「青年期」と呼んでいます。この時期の心の課題は「アイデンティティ（自己同一性）」を作ることであると考えられています。つまり、「自分とは何か」ということに悩み始めて、「これが自分だ」「自分はこれでいいのだ」と思えるようになることを指しています。

このために、大学時代は自分を作るための「モラトリアム（元々は支払い猶予期間という意味）」と考えられています。学生である間はいろいろな社会的義務から免除されますが、その代わりに大学４年間は、さまざまな経験を積んで、自分というものを作り上げていく準備をする時間になるのです。

親の影響を見直し、もう一度進路について考え直そう

その際に、皆さんがぶつかるのは親や周囲からの「期待」ではないかと思います。「親が教師だから自分も教師になることを期待されている」などの話はよく聞きます。また、どんな子どもも親の影響を受けて育つので、親の影響抜きに真っ白な自分を作り上げることはできません。

しかし、親から受けた影響について、自分の経験を基にして、大学在学中によく考えてみることが「自分」を作る上で特に大切だと思われます。「親は～と言うけど、大学での授業（実習・サークル・ボランティアなど）の経験ではちょっと違うかな」などと考えていく中で、本当に自分がやりたいことは何か、自分に向いていることと向いていないことは何かが見えてくると思います。

その結果、親が期待する方向と同じ方向に進路選択する人もいるでしょうし、全く違う方向に考え直す人もいるでしょう。大学時代に親からの影響を含めて自分の進路についてもう一度考え直し、自分で進路を選び直してほしいと思います。再検討するための「根拠」を得るためにも、大学４年間にさまざまなことに挑戦して、経験を積むことをお勧めします。

（保健管理センター・カウンセラー・三上謙一（みかみけんいち））

第16回

留学中の学生からの協定校紹介

留学中や帰国直後の学生から届いた文章と写真で、北海道教育大学の全学協定校を紹介します。
16回目の今回は、ノルウェーのベルゲン大学とイギリスのロンドン大学アジア・アフリカ学院です。

TO

ノルウェー
ベルゲン大学

留学期間
2017年1月～2017年12月

貞廣 慎太朗（さだひろ しんたろう）さん
函館校・国際地域学科・地域協働専攻・国際協働グループ4年

Rundemanenという山の頂上から

ベルゲンの野球チーム
（本人：前列左から2番目）

所属する学部の建物

大学敷地内中心にある美術館

ノルウェー第二の都市ベルゲンは山と海に囲まれた自然豊かな街です。夏至が近づくと日没は23時頃になります。

ベルゲン大学では学部に捉われず自分の興味のある分野の授業を自由に選択できます。私はノルウェー語と北欧政治史、アメリカ史を履修しました。英語の授業は初めての経験で、先生が何を言っているのかわからずパニックになることも多々ありましたが、なんとか試験を突破したときには達成感がありました。

ベルゲンは雨の多い街で有名らしいのですが、私はそれほど多いとは思いません。休みの日は山に登ったり、湖に行ったりと自然を楽しめます。私が特に楽しんでいる活動は、野球チームでの活動です。夏場は約2週間に1回のペースで試合が組まれます。試合に勝つと抱き合って喜ぶのは日本ではあまり経験したことがありませんでした。

後輩の皆さんへ。授業やアルバイト、部活動などで慌ただしいままに進級や就活を迎えようとしていませんか？　私は留学中にゆっくりと自分を見つめ直す時間ができたことをありがたく感じています。明確な理由はなくても、好奇心さえあれば留学のハードルは高いものではありません。ぜひ挑戦してみてください。

TO

英国
ロンドン大学アジア・アフリカ学院

留学期間
2017年1月～2017年12月

三村 真凜（みむら まりん）さん
函館校・国際地域学科・地域協働専攻・国際協働グループ4年

私はロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）のELASというコースで勉強をしています。SOASは、ロンドンの中心地に位置しており、大英博物館やハリーポッターで有名なキングスクロス駅など、さまざまな観光地がキャンパスの近くにあります。大都市ロンドンは忙しい街ですが、さまざまな人が暮らしており、毎日新しい発見があって、暮らしていてとても楽しいです。

ELASは、英語圏への大学、大学院進学や英語学習を目的とした人々へのコースです。なので、授業の内容は主に英語でのエッセイの書き方、プレゼンテーションの仕方、アカデミックサブジェクトにフォーカスしています。英語学習者が集まるコースなので、個人の英語力はバラバラで、英語力に応じてクラス分けがされており、自分の英語力に合った授業が受けられます。

SOASの魅力は、学生がとてもリベラルで、日本ではなかなか出会うことのない考え方を持った人がたくさんいるところだと思います。私は、函館校で政治などを勉強していますが、イギリスの学生は政治や外交について自分の意見をしっかり持っており、はっとさせられる日々を過ごしています。またSOASの学生はアジアに興味を持っている学生が多く、友達を作りやすいのも魅力の一つです。

ロンドンでの生活はかなりお金もかかって大変ですが、出ていくお金以上に得られるものがあります。世界を自分の目で見たい方にはとてもお薦めしたい留学先です。

大学での授業の様子

寮のキッチンで誕生日パーティー
（本人：写真中央）

BeatlesのAbbey Roadで（本人：左から2番目）

かわいくておいしいマーケットもいっぱいあります

札幌校

台湾研修記録

特別支援教育専攻の学生が台湾の台北市を訪れ、日本と異なる特別支援教育について学びました。今回は参加学生の一人である藤原つむぎさんにお話を聞きました。

インタビュアーの声

日本と海外の特別支援教育の現状について考えることができる、素晴らしい研修だと思いました。私も特別支援教育に興味があるので楽しくお話を聞けました。藤原さんや青山先生をはじめ、快く取材に協力してくださった皆さん、ありがとうございました。

Interviewer
天野 美代子
（あまの みよこ）
札幌校・教員養成課程・理数教育専攻・算数・数学教育分野3年

TO

研修
台湾

期間
2017年2月20日～24日

藤原 つむぎ（ふじはら つむぎ）さん
札幌校・教員養成過程・特別支援教育専攻4年

※今回の研修の概要を教えてください。

2月20日～24日の日程で、台湾の台北市に行きました。青山眞二先生と齊藤真善先生引率の下、16人の学生が参加しました。青山先生の企画に興味のある学生が有志で集まったものなので、講義の一環ではありません。この研修の目的は、台北市内の特別支援学級と特別支援学校への訪問です。

※活動内容についての詳しいお話を教えてください。

始めに台北市立大学附属小学校へ行きました。台北市立大学は、台北市立教育大学と台北市立体育学院が合併して新たにできた大学で、主に小学校の先生を育成するところです。そこでは特別支援学級の授業観察をしました。また、附属小学校だけでなく大学の方にも行き、キャンパス内を見て回ったり、教授による大学の歴史についての講義を受け、学生と交流をしたりしました。特別支援教育専攻だけでなく国語科など他専攻の学生や大学院生もいて、みんな日本語が堪能でした。特別支援教育について話し合うためというよりも、まずは友達になろうという交流で、一緒に食事をとり、観光に出かけました。次に新北特殊學校へ行きました。そこは大規模な高等特別支援学校で、パラリンピック選手を輩出するなど、特に運動に力を入れている学校です。活動は主に見学でしたが、農作物を育てて売るための畑や、レジ打ちの練習のための小さいお店が校内にあり、職業訓練のための設備が充実しているという印象を受けました。また、職業訓練以外の設備も整っていて、肢体不自由の生徒も快適に使用できるための工夫がなされたプールなどもありました。

※研修の感想をお願いします。

台湾では、日本のように聾学校や盲学校など障がいによる学校の区分がなく、どんな子も地域の小学校の特別支援学級に通っています。そういった日本との違いに興味を持ちました。

ガイダンス

引率の青山先生

学校見学

観光

講義

集合写真

INFORMATION

海外留学ハンドブックを作成しました

国際交流・協力センターでは、北海道教育大学の留学制度について皆さんによりよく知ってもらうために、『北海道教育大学海外留学ハンドブック』を作成しています。

各種留学の種類や手続きをはじめ、留学の費用や経済支援など本学で行う留学制度についての手引書となっています。また、「留学体験記」では、留学先の時間割や1日のスケジュール例などが掲載され、留学生活を具体的にイメージできるようになっています。

各校学務グループ（札幌校は国際課）で配布していますので、ぜひお越しください。

国際交流・協力センターHP
http://www2.hokkyodai.ac.jp/international-c/jp/

エデュケーション・アゴラにご参加ください 教員志望者要チェック！

本学では、平成24年度からエデュケーション・アゴラを開催しています。

エデュケーション・アゴラとは、教員を志望する学生や現職教員を対象に、教育関係者や他分野に携わる方々、一般の方々などが集まり、教育に関わるテーマについて語り合う場です。

これまでに37回実施され、平成28年12月には特別編として学生が内容を企画・運営した、「学生によるエデュケーション・アゴラ」も初めて開催されました。

平成29年度も右ページのとおり開催予定です。

ゲストスピーカーによる話題提供の後に質疑応答や意見交換を行うほか、参加者同士の交流を図ることができますので、たくさんの方のご参加をお待ちしております。

詳しくは、大学HPをご覧ください。
http://www.hokkyodai.ac.jp/distinctive/teacher/training/relation-education_agora.html

※「アゴラ」とは、ギリシア語で古代ギリシアの都市国家にあった公共の「広場」という意味です。

◎エデュケーション・アゴラ

回　数	日　時	講師氏名	所属・役職	テーマ	会　場
第38回	9月22日(金)(18:30～20:30)	よろずや　りゅういち 萬谷 隆一	北海道教育大学教授(札幌校)	これからの小学校英語で目指すこと	北海道教育大学 札幌駅前サテライト 教室1
第39回	12月1日(金)(18:30～20:30)	いしかわ　なおこ 石川 尚子	株式会社ゆめかな代表取締役	未定(学校運営「ミドル・リーダー養成」について)	
第40回	2月16日(金)(18:30～20:30)	いど　まさみ 井門 正美	北海道教育大学教職大学院長	未定(アクティブ・ラーニングについて)	

◎学生によるエデュケーション・アゴラ

回　数	日　時	講師氏名	所属・役職	内　容	会　場 ※
第2回 学生アゴラ	11月10日(金)(16:30～18:30)	てらだ　さとる 寺田 悟	北海道教育大学学校臨床教授(札幌校)	講演 グループ別検討会 発表等	札幌校：208教室 旭川校：N330教室 釧路校：第1会議室 函館校：小会議室
		よこふじ　まさと 横藤 雅人	北海道教育大学学校臨床教授(札幌校)		
		さとう　せいじ 佐藤 聖士	北海道教育大学学校臨床教授(旭川校)		
		ふくおか　まりこ 福岡 真理子	北海道教育大学学校臨床教授(釧路校)		
		ほし　ゆたか 星 裕	北海道教育大学学校臨床准教授(釧路校)		
		こまつ　かずやす 小松 一保	北海道教育大学学校臨床教授(函館校)		

※会場は変更になる場合がありますので、大学HPよりご確認ください。

平成28年12月に開催された特別編「学生によるエデュケーション・アゴラ」の様子

基調講演

テーマ別検討会

学生による発表

参加者の声
「講師の先生方から、教師になるにあたっての実例を交えたお話が聞けた」
「授業ではなかなか学べないこと、分野の違う学生と話し合う機会を得ることができた」

学園情報誌 HUE-LANDSCAPE編集局から

編集後記

▶第27号の編集にご協力くださいました学外・学内の皆さま、誠にありがとうございます。このたび編集局員から新しく本誌5代目編集局長に就任した、岩見沢校の宇田川耕一（芸術経営学）です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

今回の特集は「自慢です。わたしのキャンパス」です。施設、団体、活動、人など種類は問わず、各キャンパスの自慢できるものを紹介しています。学内外の読者が楽しみつつ、各キャンパスの良いところを知る広報の役割も果たす特集を目指しました。「授業」「研究」「ボランティア活動」「学生と学生のつながり」「先生と学生のつながり」など、北海道教育大学の幅広い領域を紹介できたのではないかと自負しております。

▶このたび、本誌のさらなる充実と本学学生の就職支援の一助としたく、企業等のお名前を本誌に掲載することとなりました。趣旨にご賛同いただき、ご支援を賜りました企業名は、裏表紙に掲載しております。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

▶前号まで編集局長を務められました田口哲先生（札幌校）が、局長を退任されました。2年間にわたる編集の取りまとめ、本当にお疲れさまでした。また、編集局の学生スタッフおよび編集局員のうち、札幌校の松尾知実さん、今夢花さん、今尚之先生、旭川校の山﨑将太郎さん、岩橋瞳さん、菅野悟先生、釧路校の湧川碧斗さん、佐藤直史さん、鴨川太郎先生、函館校の傳法悦子さん、岩見沢校の小松崎笑帆さん、渡部早稀さんが前号で退任されました。大変お疲れさまでした。ありがとうございます。

▶今号から新たに、札幌校の天野美代子さん、稲葉拓紀さん、幸坂健太郎先生（副編集局長）、旭川校の中村昂平さん、小川優汰さん、角一典先生、釧路校の西村日花里さん、渡辺有紀さん、土岐圭佑先生、函館校の水口史菜さん、松村菜美子さん、山邉瑞穂さん、岩見沢校の小原ハナコさん、秋本結以さん、舩岳紘行先生が学生スタッフならびに編集局員に就任されました。新メンバーの活躍にもご期待ください。

感想・意見・要望・情報・アイデア募集中！
歓迎！　らくがきイラスト・写真・その他の投稿！

▶○○の活躍を取り上げてほしい、○○が面白そうなので取材してみては？　など、本誌についてのご意見・ご要望などをお寄せください。可能な限り掲載させていただきますので、欄外の編集局のメールアドレスまでお知らせください。

▶本誌の各ページを飾る「らくがきイラスト」も、随時募集しています。各キャンパスの編集局員の先生方に渡してください。
その他、写真やイラストなどの画像、書・絵画・彫刻・工芸などの作品を写した写真の投稿も歓迎します。画像ファイル（拡張子がjpg）を添付したメールを、編集局のメールアドレスまでどうぞ。

ご意見・ご感想・ご要望を編集局にお寄せください！
メールアドレス　landscape@s.hokkyodai.ac.jp

本誌バックナンバーは北海道教育大学ホームページで読むことができます。
HUE-LANDSCAPE　検索

HUE-LANDSCAPE は
学生スタッフが大活躍する学園情報誌です！

小川 優汰
旭川校

中村 昂平
旭川校

小原 ハナコ
岩見沢校

秋本 結以
岩見沢校

西村 日花里
釧路校

渡辺 有紀
釧路校

天野 美代子
札幌校

稲葉 拓紀
札幌校

佐々木 柚香
函館校

濱田 亜弓
函館校

堀江 音名
函館校

松村 菜美子
函館校

水口 史菜
函館校

山邉 瑞穂
函館校

編集局の E-mail ▶ **landscape@s.hokkyodai.ac.jp**

HUE-LANDSCAPE に関するご意見、ご感想をお気軽にお寄せください。
企画案や写真・イラストも、常時募集しています!

本誌は、本学学生である自覚を高め、有意義な学生生活と将来への明確な目的意識を持つことを促進する情報を紹介するため、平成17年1月に創刊されました。

今号の発行にあたり、本誌の趣旨にご賛同いただいた企業の皆様からご支援を賜り、誠にありがとうございます。

今後とも本学学生へのご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

石屋製菓株式会社
カネシメホールディングスグループ カネシメ 髙橋水産株式会社
札幌商工会議所
株式会社 札幌振興公社
株式会社 芝コーポレーション
上光証券株式会社
北栄保険サービス株式会社
株式会社 北洋銀行
北海道火災共済協同組合
一般社団法人 北海道貿易物産振興会
（50音順、敬称略）

HUE-LANDSCAPE
Autumn/Winter 2017 No.27

平成 29 年 10 月　発行
発行：国立大学法人 北海道教育大学
編集：北海道教育大学学園情報誌 HUE-LANDSCAPE 編集局
　　編集局長／宇田川耕一（岩見沢校）
　　編集局員／角　一典（旭川校）　舩岳　紘行（岩見沢校）
　　土岐　圭佑（釧路校）　幸坂健太郎（札幌校）
　　長尾　智絵（函館校）
編集協力：株式会社須田製版

国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

北海道教育大学ホームページ
http://www.hokkyodai.ac.jp/